# 人物で語る日本デンマーク

## ㉝ 大見 為次（ためじ） Ⅰ

大見為次は、一八九四年（明治二七年）五月六日、碧海郡安城村字出郷（現在の新田町）に生まれた。八月一日に日本が清国（現在の中国）に宣戦を布告した年である。尋常小学校への入学が一九〇一年（明治三四年）、開校七年目の愛知県立農林学校（現在の安城農林高校）へ入学したのが一九〇七年（明治四〇年）、同校卒業は一九一一年（明治四四年）三月だった。一九〇五年（明治三八年）に日露戦争が終結し、株で巨万の富を得た商人が「成金」と呼ばれ、生糸の暴落や労働争議の急増をよそに都会では婦人の頭にリボンが流行した一九〇七年ごろ、「明治元禄」と呼ばれることのある時代だった。

大見の人格形成には農林学校が大きな役割を果たした。彼自身がのちに回想しているところによると、彼は、初代校長山崎延吉から修身の授業を受けたり、剣道の寒稽古（かんげいこ）で直接打ち合ったりしている。修身は教科書を使うのではなく、山崎の思想を語って聞かせたようである。彼は、山崎のほかに教頭の熊谷八十三（やそみ）の名もあげている。のちに西園寺公望（さいおんじきんもち）の執事となった人である。また、講堂の正面の左右に菅原道真と二宮金次郎の胸像があったことをあげている。

彼が青年時代に自らを陶冶（とうや）したのは農林卒業直後に入会した村の青年の学習会「双葉会（ふたばかい）」でのことと思われる。この会は、出郷または安城新田と呼ばれたこの集落の青年が集まって人生や社会を語り、農業のあり方を討議していたものである。会員は二十人程度で、罫紙などに筆で原稿を書き、持ち寄ってとじ、一冊の雑誌（双葉集）を作り、会員の間で回覧した。短歌や俳句、詩や小説のほか、職業論や社会論・人生論を投稿し、互いの批評も掲載した。執筆の青年はみなペンネームを持っており、大見は「天山山人（てんざんさんじん）」と名乗った。

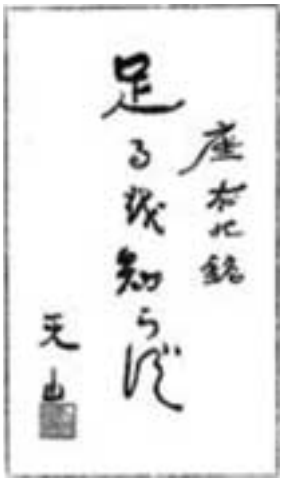
天山の投稿を見ると、「…国家社会人世に尽くすの人あらんを欲す…」（『そぞろ言』一九一一年一一月号）、表題『現代の青年を代表して先輩者諸氏に訴ふ』（一九一二年八月号）などがあり、病気入院直後には長い原稿『病窓漫筆－文学の価値、地方史編纂（へんさん）の必要－』を発表し、「…人生の幸福は、肉体の上に非ずして、心霊の上に存すもの也…」（一九一二年一一月号）などと発表している。彼は社会派だったことが分かる。同じ号に同人の不老は、「双葉集ハ安城新田将来ヲ代表スル位置ニ迄進ムノ決心ヲ以テ進行セネバナラヌ…（『評論』同号）と書いている。

『双葉集』は、一九一〇年（明治四三年）に創刊号が出され、一九一八年（大正七年）ごろまでに九〇冊以上作製されている。一九八六年（昭和六一年）、この回覧雑誌の復刻編集にとりかかった小中学校のＰＴＡ歴史クラブの女性たちは感想を次のように書いている。「…当時の人には、話題がある、書くことがある、書きたいことがある、そして書く。それだけ真剣に生きていたのです。…」

『双葉集』の青年たちは、会のことを「双葉舎同窓会」と書くことがある。この集落の自治活動のなかに「夜学校」の経営があり、尋常小学校を卒業してから十八歳（数え年）くらいまで所属した。同窓会とはこれを終えた青年の組織だったからだろう。双葉舎のなかで天山はもっとも優れた論客の一人だった。

その彼が一九一三年（大正二年）、集落に渦巻く大問題のなかに飛び込んでいった。

文　天野暢保（のぶやす）



天山筆座右の銘「足るを知らず」
『双葉集』第19号1912年6月号から